



愚者の文学
松原新一

冬樹社



冬樹社

「愚者」の文学

昭和四十九年六月三十日初版第一刷発行

著者 松原新一

発行者 高橋直良

発行所 冬樹社

東京都千代田区神田神保町二の十八 一〇一

電話〇三（二六四）〇三四六 振替東京七七五七

印刷所 本文・東徳株式会社

平版・モンド株式会社

製本所 一重製本株式会社

装幀者 秋山法子

©Shin-ichi Matsubara, 1974. 0095-10205-5190

目次

岩野泡鳴論	二七
近松秋江論	三
葛西善藏論	六
嘉村礒多論	四
宇野浩二論	二五
へ誤ちゝをかかえた死	七

徳田秋声論……………一四二

耕 治人論……………一五五

広津和郎論……………一八九

「愚者」の文学について……………三七

「無くてならぬもの」への問い……………三五

「愚者」の文学

〈誤ち〉をかかえた死

宇野浩二の年譜（浜川驍編）によれば、昭和二年の頃として、「六月、精神に変調をきたし、広津和郎、芥川龍之介らの配慮で、斎藤茂吉の紹介により、小峰病院に入院。七十日加療ののち、八月に退院。その入院中に芥川が七月二十五日に自殺した。」ということが記されてある。この宇野浩二の入院前後の具体的ないきさつについては、たとえば広津和郎の『同時代の作家たち』のなかに精細に描写されている。そこに描きだされてある、ある日の夜中に桜木町の往来のまんなかで、突然宇野浩二が広津和郎に家へ行って母親を呼んで来てくれといひだし、さらに妻と兄とをつづけて呼んで来てほしいといひだしたときの、

「宇野は往來の真中で、母と細君と兄とを抱きかかへるやうにしたかと思ふと、突然こんな声を彼が持つてゐたかと思はれるやうな大きな声を張り上げて、

『これだけが宇野浩二の家族だぞォ！』と叫び、続いて、『おう！　おう！　おう！』と何度も語尾を引つづて唸るやうに叫びつづけた。

彼に抱かれた三人の家族は言葉も出ずに悲しさうな顔附で、咆えつづける彼に取りすがつてゐ

た。」

という光景をはじめとして、宇野浩二の変調のいくつかの具体的な様相には、まことに鬼気迫るものがある、といわねばならぬが、今、私の注目するのは、そういう宇野浩二を漸く無事入院させたあと、広津和郎と芥川龍之介との間で散歩の途中にとりかわされた次のようなやりとりの部分である。

「『併し芸術家の一生として立派なものだと思ふね』と芥川君が突然ひとりごとのやうに云つた。『併し』と云つたところを見ると、それを口に出す前に先刻から彼がその事を考へてゐたのが解る。

『若しあのままになつたとしても立派だよ。発狂は芸術家にとつて恥ぢやないからね。——宇野もあれで行くところまで行つたといふ気がするよ』

私はその声音に『共感』といふよりも『羨望』に類するやうな響きを聞き、やや驚きに似た感じで聞き耳を立てた。紺飛白の単衣に黒細の羽織を着、日和下駄を穿いて洋傘をぶらさげてゐる彼の肩のあたりは、家の中で見るとさうでもないが外で見ると痩せが目立ち、ごつごつと骨張り、何か薄寒い感じがする。彼がよく戯画に描く河童——痩せた河童が洋傘をぶら下げて、少し魂を遊離させて歩いてゐると云つたやうな感じがする。(中略)

私はそれとは全然別の事、もつと現実的な事をさつきから考へてゐた。そこで彼に向つて云つた。

責任とについての考察」参照）、それぞれ宇野浩二の発狂というショックな事態に反応してみせた、といっているのである。ここで私は、両者の対応のしかたのいずれが是とさるべきかについて、たやすくあげつらうことができるとは思えないが、ただ私一個の実感に即せば、残された宇野浩二の家族の運命をおもいやって暗たんたらざるをえなかった広津和郎の心情をより人間的とするなら、発狂を芸術家にふさわしい行末の一つとして肯定してみせた芥川龍之介の言葉は、そこに典型的な芸術至上主義者の面目をみるとしても、いかにも非人間的とおもわざるをえない。ということとは、「僕はそれよりも宇野があのままになったら、宇野の家族がどうなるかとそれを考へてゐるんだよ」という広津和郎の暗い心配にこもる切実なリアリティを少なくとも私は否定することができない、ということである。

おもうに、この残された者の悲劇性という問題は、近代日本文学史のなかの黙視しがたい影の領域をつくりあげているだろう。

田山花袋『東京の三十年』のなかには、川上眉山が剃刀で首筋を切って自殺したとき、かけつけた高瀬文淵が、芸術家が妻や子供を持つのは考えものだと思はれたじゃないか、死んでいく君はいい、しかし後に残った者はどうすればいいんだ、と棺にとりすがって泣きながら悲痛な叫びを発したという挿話が紹介されてある。私の内部で、このような残された者の悲劇性というイメージが刻印されたまま容易に消えおちてはくれない。

明治以後の日本の多くの文学者のなかで、私なりにひそかに関心をひきよせられてきた幾人か

の文学者がある。ひとくちに、道に迷った、もしくは道を踏みはずした文学者の生きかた、というふうにいっていいかとおもう。道を踏みはずしたというのは、生活現実の秩序を支配する時代のモラルの一般的な水準からの逸脱という意味である。それを仮りに、愚者と呼んでおきたい。具体的には、岩野泡鳴、葛西善蔵、近松秋江、嘉村礒多といった人々によって代表されるような文学者のイメージをおもひ描くことができるだろうか。これらの人々は、自分のしでかした大きな誤ちをはらんだ人生を根拠としてこそ、はじめてみずからの文学をつくりだした。誤ちとひきかえにしてうみだされた文学であればこそ、どうとりつくりつた顔をしてみても誤ちにおちる脆さから決して自由ではありえぬ人間そのものの暗愚の身証としてその文学は輝いており、同時にまた、その文学の輝きの裏には、誤ちの犠牲をしいられた人々の悲劇がむごい影として否応なしにはりついてしまっている。その影の領野をいたむおもいにうながされるようにして、たとえば宇野浩二は、『終の栖』を書き、嘉村礒多死後に残されたちとせ夫人の運命を叙しつつその悲しみをすくいあげねばならなかったのだ。

それにしても、誤ちは清算されえるか。

ひとたび誤ちをおかしてしまっただとして、死ぬまでにそれを洗い流しておきたい、人生に支払った赤字をせめて消し去ってから死にたい、と願ったとしても、はたしてそういうことは可能なことだろうか。

谷崎精二の『放浪の作家』と題する葛西善蔵評伝によれば、せいぜいあと一兩日の命だという

医師の診断の下された病床にあって、葛西善藏は、めっきり見舞客のふえたことに気づき、新聞にでも出たのかもしれない、新聞をみせてくれといいたしたので、しかたなく家人が記事の出ている新聞をみせたところ、「絶望の葛西善藏氏」という見出しのついた記事をくり返し読んだあと、大して驚きもせずに、「割合によく書けてゐる」と呟いたそうである。自己の絶望であることを伝える新聞記事を読んで、「割合によく書けてゐる」などと客観的に批評をもてあそんでいられる葛西善藏のふてぶてしい作家魂には驚嘆せずにはいられぬが、今はしかし、そんなことに感心してはいられない。それよりもむしろ私の目は、『放浪の作家』のなかの次のような個所に強くひきよせられていくのである。

「(昭和三年)一月に彼は急性腎臓炎に罹って全身がむくみ出し、酒も控へなければならなかつた。それはやがて軽くなつた。三月に彼は又咯血した。四月三日に、おせいとは次女を生んだ。久美子と名づけられた。梅雨季に入ると葛西の病状は益々悪化し、衰弱が眼立つて来た。(中略)」

筆者も屢々彼の病床を見舞つた。七月中旬、あと一週間しかもつまいと医者が秘かに家人に告げたと云ふので、郷里にある長男と北海道及び石の巻にいる二人の姉に『ゼンザウビヤウキキトク』の電報が打たれた。

医師が看護婦を雇ふ様に勧めたので、筆者もその必要を葛西に説いたが、『まあ待つてくれ。金が出来るとはつきり決らなければ。』と答へて、彼は容易に応じなかつた。およそ金の事などは無頓着だつた彼が、急に金を惜しみ出したのは、死後一文でも多く遺族たちに残していつてや

らうといふ考へ方らしかった。」

文学を別とすれば、酒と貧乏こそは、葛西善蔵のかわることのない友達であつたらしいことは、すでによく知られている。『葛西善蔵全集』第三卷（昭和三年、改造社刊）に跋を書いた徳田秋声は、「君の生涯は酒と芸術と貧乏に終始してゐる。そして又それは君自身にふさはしいものだと思つてゐたらしい。酒から覚めたり、貧乏から足をぬいだりして、普通世間人のやうにちやんとした生き方することは不似合だと思つてゐたらしい。礼服や袴が柄にないと思われたと同じに。」と述べている。そういう葛西善蔵の面目は、他ならぬその作品群そのものが十分に証しててもいる。「普通世間人のやうにちやんとした生き方することは不似合だと思つていたらしい」葛西善蔵は、他方ではまた、『子をつれて』にあるように、「『……が、子供等までも自分の巻添へにするといふことは？』さうだ！ それは確かに怖ろしいことに違ひない！」とおもわずにはいらぬ人でもあつた。しかし、一生の終りにちかいときになって、「死後一文でも多く遺族たちに残して行つてやらうと云ふ考へ」を起したとしても、すでにそのときは手遅れになつてしまつていたのである。げんに、『放浪の作家』によれば、葛西善蔵死後、ある事情から郷里の妻子の方だけに金がはいり、東京の遺族には一文の印税もはいらないうようなひどいことになつたので、途方にくれた遺族扶養の目的で友人たちが寄附金を募らねばならなかつた、というやはり葛西善蔵は、多くの人々を自分の生きかたの巻添えにしたまま死んでいかねばならなかつたのである。その人並みはずれた「酒と貧乏」は、少くとも生活現実の場に即していえば、マイ

ナスの財産、誤ちであったというしかない。葛西善蔵は、ついにそれを清算することなく死んでいったのである。谷崎精二のいうように、「現実を蔑視した者はいつか現実から手痛い復讐を受ける。」ということになるだろうか。

先年、志賀直哉のなくなったとき、「清潔な生涯」ということがいわれた。本当に、人は、そのようでありたい。そう願う私であるが、にもかかわらず、誤ちの深さをかかえこんだまま生きて死なねばならなかった人の業苦のすがたに心ひかれてゆくのをどうしようもない。かつて私は、近松秋江を描いた正宗白鳥の『流浪の人』を読み、そこに叙述されている近松秋江死後の遺族の惨状を読んだときのショックを忘れることができない。正宗白鳥は、こう書いている。

「秋江は、晩年は緑内障で、しだいに目が見えなくなり、足も不自由であったが、二人の娘があったために、どうにか生きていられたのであった。『ないがましかよ、気が楽か』と、昔よく唄っていた彼も、偶然産れでた子供を、苦勞して育てたおかげで、盲目老衰の身も野垂れ死することを免れたのであった。

私は彼の死後に彼の二女と親しくするようになったのだが、長女は虚弱で、性質も感傷的であった。家が戦災に罹らなかったのを幸いとして、頭の悪い母親と、女ばかりで細々と暮らしていたところが、その借家に、家主が強制的に他の家族を同居させることとなり、彼女らは一室に押しこめられた。そのうち長女は胸の病気に罹り、高熱で悩まされるようになり、三人が狭い一室に起臥するのでは治療にも不便であり、他の同居家族にも嫌われるので、日一日と苦境に陥り、女